

1. 単元名 「知行合一―大塩平八郎の乱から学ぶ―」

2. 単元の目標

- ・大塩平八郎に関する資料の読み取りや大塩事件研究会の方への聞き取りなどを通し、自分たちの祖先が乱に参加した背景を理解する。(知識・技能)
- ・自分たちが住んでいる地域の祖先の人々が乱へ参加した理由や背景を踏まえ、地域の魅力やルーツを大切にするためにできることについて考えることができる。
(思考・判断・表現)
- ・大塩平八郎、大塩平八郎の乱に参加をした人々、それぞれの思いや考えに触れ、自分たちの学んだことを行動して発信すること(知行合一)を大切にする態度を持つ。
(主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

本学習では、天保八年(1837年)に大阪において起きた「大塩平八郎の乱」を教材化した。大塩平八郎の乱について教科書(日本文教出版)では次の通り記述されている。

18世紀後半から、不作により、米などの値段が上がったり、飢え死にする人が多数出る大ききんがおこったりするなど、生活の不安が大きくなりました。19世紀のなかごろ、もと幕府の役人の大塩平八郎が、生活に苦しむ人々を救うために兵をあげ、大阪の大商人のやしきなどに攻め入りました。この事件はしずめられましたが、幕府をたいへんおどろかせました。

「大塩平八郎の乱」を教材化する理由は2つある。

1つ目は、児童の祖先が乱へと参加しており、「つながり」を感じることができるからである。本校の名前には「森小路」という地名が入っている。大塩平八郎の乱へ参加したものとして「大塩平八郎一件書留」において「森小路村七郎兵衛他3名」や「森小路村の医師・横山文哉」という名が書かれている。特に横山は乱において大塩の門人として参加している。このことから自分たちの住んでいる地域の祖先から「つながり」を感じやすいと考える。



2つ目は、追究のエネルギーとなる学習問題をつくり出すことができるからである。児童にとって「つながり」を感じやすい一方で、乱自体は悲惨なものである。乱の首謀者たちはほとんどが処刑されている。先述した森小路村の横山も最終的には処刑されたのち、遺体は塩漬けされ、磔となっている。自分たちの生活を変えるために行動をしたが、悲惨な死を迎えてしまう。その間で揺さぶられ「なぜそこまでして

自分たちの祖先は乱に参加したのか」という疑問が生まれる。このようなジレンマがある教材と出会うことは、活発な疑問や気づきを生むとともにより深い学びへと進む追究のエネルギーとなる学習問題を醸成できると考えた。

(2) 児童観

本学級の児童は、社会科の学習においては縄文時代から江戸時代までの時代において登場する人物について進んで調べ学習を中心に学習してきた。また、調べたこと基に思考ツールを活用して整理することで、その時代背景や人物同士の関係性について気づくことができた。一方でこれまでの人物学習において大阪に関わる人物であつてもどこか遠い存在である感じており、その人物や関わる人たちの思いや考えに気づくことはあまりなかった。

総合的な学習の時間ではユニクロが主催している「服のチカラ」プロジェクトを中心にSDGsにして関する学習を進めてきた。校内において呼びかけるチラシを作成し配布したり、動画を作成し公開をしたりしてきた。地域に関しても近くの中学校、病院にもコンタクトを取り、プロジェクトの発信をしてきた。一方で教師主導であることから一人ひとりのプロジェクトに関する寄与は差が大きくあつた。

(3) 指導観

まず、大塩平八郎の乱について自分たちの地元とのつながりに気づくことを起点とする。児童は今住んでいる地域の祖先が「乱」に参加していたことについてほとんど知らないため、その事実が大きく驚くだろう。そして、その一方で彼らの処刑されることとなる事実から「どうしてそこまでして私たちの祖先は乱に参加したのだろうか」という学習問題を設定することができる。

次に「大塩平八郎の乱」が一体どんなものだったのか、大塩平八郎がどんな人物であつたのかを調べていく。図書室や地域図書館の資料、インターネットを活用して確かめていく。さらに、その中でより詳しく出てきた疑問については、大塩事件研究会の会長（兵庫県立歴史博物館の館長）をされている薮田氏を招き、自分たちの祖先がどのように考えを持ち参加していたのか、考えを深めていく。その中で大塩平八郎が座右の銘としていた、「知行合一（ちこうごういつ）」について本当の知は実践を伴わなければならないことに気づき、自分たちが発信していこうとする児童の行動化を促したい。

(4) ESDとの関連

・本学習で働かせるESDの視点（見方・考え方）

【責任性】：命をはってでも乱に参加することで命を失うことになるにも関わらず祖先は乱に参加した。

・本学習で育てたいESDの資質・能力

【批判的に考える力（クリティカル・シンキング）】

太平が当然であると思われていた幕府の支配を問い直し、行動化した。

【進んで参加する態度】

「知行合一」の言葉を大切に、よりよい地域づくりについて自分にできる行動をとる。

・本学習で変容を促すESDの価値観

【世代内の公正】

大塩平八郎および彼に賛同した祖先の人々の思いや考えから、公正・公平な社会のあり方を教えることができる。

【世代間の公正】

次の世代のため、これから大阪のために行動を起こしていく責任が今の時代の私たちにはある。

・達成が期待されるSDGs

目標 11 住みよいまちづくり

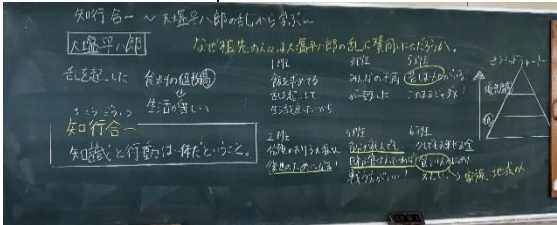
目標 17 グローバル・パートナーシップ

4. 単元の評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
私たちの祖先が乱に参加したことについて大塩平八郎の乱について調べたり、大塩事件研究会の方への聞き取りをしたりして理解することができている。	祖先が乱に参加した理由について問いをもち、自分たちの生活をよりよくするために、行動できることを考え、表現している。	乱に参加した祖先の人々の思いにあこがれるとともに、自分たちも地域社会においてできる行動を考え参画しようとしている。

5. 単元の指導計画（全6時間）

	学習内容	●留意点
見 つ め る	○大塩平八郎の乱について知り、自分たちの地域の祖先とつながりがあることに気づく。 ○学習問題を作る。 なぜ私たちの祖先は乱に参加したのだろうか	●国会図書館よりお借りした資料をもとに、より関心を持たせる。
調 べ る	○「大塩平八郎の乱」がどのようなものだったのかを調べる。 祖先の人たちは勇気あるなあ。  大塩平八郎の乱及び乱への賛同者はどのように行動したのだろうか。 ○大塩平八郎の乱の事実について伝えてもらう。 大塩事件研究会 会長 兵庫県立歴史博物館 館長 薮田 貫様 	●図書室や図書館の資料、インターネット、NHKの動画資料などから調べさせる。 ●ゲストティーチャーには実際に来ていただき、児童からの質問に、回答していただく。 ●次の「深める」につなげるために「知行合一」についても触れてもらう。

深める	なぜ祖先の人々は大塩平八郎に賛同したのだろうか。 ○調べたことをもとに、自分たちの祖先の思いについて考える。 ○考えたことを藪田様に手紙形式で送り、評価をもらう。 ●自分たちの命もあるが「行動をとらなければ、何も変わらないこと」と「地域への愛があったこと」を気づかせる。  
広げる	自分たちの地域について学んだことを発信しよう。 ○大塩平八郎や祖先が行った「知行合一」を発信する。 ○地域を守り、大切にするために活動している大人に協力し活動に参加する。 ○実際に地域のさまざまな場所へ学んだことを発信していく。 ●実践したことを地域に紹介し、普段地域のために活動されている方々から評価してもらう。

6. 成果・課題

本実践を終えて、まず子どもたちのなかで歴史学習への興味・関心が大きく変化した。これまでも人物を起点として調べ学習をしてきたが、その人やその人に関わる思いに気づくことはなかった。この単元の学習後は「少し難しい内容だったけど、社会に興味を持つことができました。1人の人物でこんなにも疑問を出して、深めることができると思っていませんでした！」と自分の考えに対する深まりに驚く児童が多くいた。さらに、そのあとの単元では「この人はなぜこのよう決断をするに至ったのか?」「その時に同じ思いを共有していた人はどう見ていたのか?」など、人々の思いや物事の捉え方まで疑問を持ち意欲的に調べ学習へとむかう姿が多くみられた。

また、この考えの深まりにおいて専門家として招聘した藪田先生の存在が欠かせない。大阪の大会に住む子供たちにとって「歴史」については程遠い。そこで、兵庫県立歴史博物館の館長もされている藪田先生から直接お話を伺うことができたことで、子どもたちに歴史を学ぶ面白さに気づき、より自分たちの住んでいる地域とのつながりを意識することになった。また、子どもたちの考えに対して「地域のリーダー」として弟子たちが寄与していたと改めてコメントいただいたことで、自分たちが次の「地域のリーダー」としての当事者意識、使命感を強く感じていた。この当事者意識が「ひろめる」段階における行動化の大きな起点になったといえるだろう。

最後に「知行合一」という言葉である。この言葉が本学習においてすべて場面で大きな促進力となった。これまで子どもたちは学校という存在が「学ぶ場所」として認識することが多く、あらゆることで教員側だけが熱が燃え上がり、「やらされている感」をどこか感じる

姿があった。しかし、この言葉に出会わせてからはそれだけじゃないことに気づき、学校が「学び発信する場所」であることを行動として見せてくれた。日々の教科における学習でも生活とのつながりに気づき、「こういうことできませんか?」「こんなことしてみたいです。」と教員に伝えることが大きく増えた。学年団としても「知行合一」が子どもたちにとって学びつなげる言葉という共通認識のもと、子どもたちの行動化へとサポートするに至った。そうすることで必然と学びの好循環が生まれ、大人も子どももさまざまなことに対して好奇心をもち、やる気が生まれたと感じている。

一方で課題点として、教員側のやることがひっ迫している中でどこまで、行動化へとサポートできるかは大きな問題点であった。この実践の中で、学習同士の結びつけやつながりについては指導者が単独で行い、学年へと提案、実現したものである。だからこそ、より学年・学校として共有しマネジメント部分は分担していく必要がある。